

テーマ

精神分析の脱植民地主義的再検討と倫理的転回

適用分野

臨床心理学、精神分析、乳児研究の応用、トラウマ、倫理的転回



研究名称

脱植民地主義・倫理的転回の視座からの精神分析理論の再検証と臨床的応用

氏名所属

富樫公一 教授
文学部 人間科学科

内容

●特徴

1980年代以降、米国の精神分析はそれまでの伝統的精神分析をその内部から批判的に検証し、精神分析的相互交流を関係性や間主観性の視座からとらえなおしてきた。それは一つのムーヴメントとなり、「関係性への転回」と呼ばれる。近年になってさらに、精神分析的相互交流プロセスを記述するだけでなく、そのプロセスの中で、あるいは、そのプロセス以前に、治療者がどのように患者に出会い、かわるのかを明らかにしようとするムーヴメントが生まれた。それを「精神分析の倫理的転回」と呼ぶ。研究者はそうしたムーヴメントの中で、自らの臨床事例研究を通して新たな見解をまとめ、主に米国において独自の考えを発表している。

●研究内容

米国では、主にThe International Association for the Psychoanalytic Self Psychology と The International Association for Relational Psychoanalysis and Psychotherapyで活動している。毎年そうした学会で発表を続け、その機関学術誌において多数論文を発表している。前者の学会では、8

年にわたって評議委員を務め、学会運営も行っている。そうした学会での発表は、同僚とともに出版した『Kohut's Twinship Across Cultures: The Psychology of Being Human』（Routledge）にまとめられた。日本では日本精神分析学会運営委員、同編集委員を務め、本邦でも、自らが米国で発表した内容も含めて近年の米国の動向を詳しく紹介したり、新たな精神分析の考え方の提言を行ったりする書籍を出版している。

1. 『ポスト・コフトの精神分析システム理論: 現代自己心理学から心理療法の実践的感性を学ぶ』（編著・誠信書房）
2. 『関係精神分析入門—治療体験のリアリティを求めて』（共著・岩崎学術出版社）
3. 『不確かさの精神分析: リアリティ、トラウマ、他者をめぐって』（単著・誠信書房）
4. 『臨床場面での自己開示と倫理—関係精神分析の展開』（共著・岩崎学術出版社）
5. 『精神分析の生まれるところ—間主観性理論が導く出会いの原点』（単著・岩崎学術出版社）
6. 『トラウマと倫理—精神分析と哲学の対話から』（編著監訳・岩崎学術出版社）

キーワード

間主観性理論、関係性への転回、精神分析の倫理的転回、被害-加害関係、トラウマ、精神分析的システム理論

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 □ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究